

シュガールの異世界訪問

勇忌煉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔女と夜宴の際に嵐を起こしていたドラゴン、シユガール。

その最中、彼に連絡を入れてきたのは死んだとされていた友人だった――。

目次

シュガールとパーティー	1
シュガールとドッジボール	10

シュガールとパーティー

ドラゴンは最強の生物である。

火を吐けるし、空も飛べる。生まれによっては毒や電気、水も操れるし、魔法も使える。

故にドラゴンのほとんどが誇り高く、人間を下等生物と見なしている。

しかし同時に、討伐の対象として狙われることも多く、弱きドラゴンはすぐに狩られる。

まさに食うか食われるか。人間との関係は基本的にこんな感じである。

これがその世界における常識。つまり当たり前だった——その世界では。

とある世界の山脈。暗くなり始めた空は分厚い雲に覆われて見えなくなり、吹き荒れる風と降り注ぐ雨が徐々に強さを増していく。

白煙の如く悠々と連なる山々の上で、数人の黒マントを羽織った女性が箒に跨って飛び回り、やがてその集団に巨大な生物が加わった。

堅い鱗に覆われ、鋭利な背鰭の生えた三、四百メートルはあろうかという灰色の身体、鳥とコウモリを足して割ったような翼に頑丈な手足、角を生やした大きな頭と鋭い牙。

その巨大な生物——ドラゴンは山の頂に降り立つと、天に向かって凄まじい雄叫びを上げた。

——さあ、始めましょう。

次に女性の一人がそう言った瞬間、他の音が聞こえなくなるほどの強風が吹き荒れる。

彼女達は魔女であり、今から行われるサバトという夜宴の参加者達だ。

そして雄叫びを上げたドラゴンは夜宴で魔女らと共に嵐を起こすため、わざわざ住処の洞窟から離れた場所まで訪れている。

『ん?』

すると山頂から空を縦横無尽に飛び交う魔女達の様子を眺めていたドラゴンの隣に、通信機と同じ性能を持つ小さな魔法陣が展開された。

それを指先で軽く押した途端、そこから声が途切れ途切れに聞こえてくるので何事かと唸るドラゴンだったが、すぐに魔法で雨や風の音を遮断して耳を傾けると、

『誰だ——』

『おーい！ 聞こえてますかシユガールさん!? なんか雑音が凄いですけどー!?』

『うるさっ!?!』

女性のものであろう明るい声が、耳の奥まで突き抜けるように響いてきた。シユガールと呼ばれたドラゴンは驚きのあまり、片耳を塞ぎながら身体を少しビクツとさせる。

よし、一旦落ち着こう。そう思いながら一息つくシユガールだが、今度は別の意味でその精悍な顔に驚愕の色を浮かべた。

『……………生きていたのか、トール』

トール。

彼と同じドラゴン（雌）であり、三つある勢力のうちの一つ、人間と敵対し破壊を信条とする『混沌勢』に属していた同族からも一目置かれるほどの実力者である。

しかし先日、神々に戦いを挑んで敗北。聖剣を突き立てられて死亡したとされていた。

ちなみに当の本人は一部の竜にだけ自分の生存を伝えていたのだが、シユガールには今に至るまで教えていなかったのだ。

それを思い出したのか申し訳なさそうに唸るトールだったが、気を取り直して続ける。

《まあ色々ありまして……今は小林さんという人間の方と暮らしています。このあとそこでパーティをやることになったんですけど、シユガールさんもどうですか?》

『おい待て。意味がわからんぞ。生きてたかと思えば、人間と一緒に暮らしている? お前が? しかもパーティだと?』

コイツ本当にあのトールか? 口調も柔らかいし、『混沌勢』の中核として神々と戦ったドラゴンとはとても思えない。

あり得ない事ばかりを言うトールに思わず戸惑い、混乱しそうになるシユガール。

トールは人間が嫌いだ。『混沌勢』に属しているのが何よりの証拠だし、シユガールが前に会ったときもその手の愚痴が多かった。

シユガール自身もトールほどではないが、過去に友を黄身のない卵で殴るといふシユールな方法で殺されたこともあり、人間に対してあまり良い感情を抱いていない。

……尤も、死んだ友に対して何とも言えない情けなさを感じてしまっているのも事実である。死因が死因だけに。

『……まあいい。聞きたいことも山ほどあるし、参加させてもらおう。他にも誰か呼んだのか?』

《ファフニールさんとルコアさん、それと故郷から追放されたカンナの三人ですね。ちなみにカンナもこつちで一緒に暮らしてます》

呪いの竜であるファフニールに羽毛ある蛇のケツアルコアトル、それに最近この世界からいなくなったカンナカムイときた。

随分と豪勢な面子だなと呆れ気味に思い、同時にある事が気になつてしまう。

——ドラゴンの数が多い。

ただでさえ強大な力を持つドラゴンがすでに二体もいるのに、追い討ちを掛けるかの如く追加で三体も人間界へ訪れる。気を付けないとその世界の秩序が乱れる恐れがあるのだ。

……とはいえ、それを強く警戒しているのは『混沌勢』と対立している『調和勢』のドラゴン達であり、どちらの勢力にも属さないシユガールはそこまで気に掛けていない。

パーティの開催場所を聞いてから展開された魔法陣を消し、音を遮断していた魔法も解除する。

現在サバトの真つ最中だが、優先度においては今回の件が上だろう。

「どこへ行くの？」

『用ができた。後はお前らだけで進めろ』

声を掛けてきた魔法の一人にそう告げると翼を広げ、飛び上がった山を後にするシユガール。

しばらく飛び続けていたが周囲に何もいないことを確認して異世界への門を開き、そのまま突撃するように入っていく。

そして他の者が自分につられて来ないよう、すぐに門を閉じるのだった。

☆

人間界。そこに到着したシユガールは本来の姿を見られないようすぐさま認識阻害を使い、ツールがいるであろう建物の屋上へ降り立ち、独自の魔法で男性の姿へと変身を完了していた。

「——よし、こんなものか」

身体の色と同じ灰色の髪、長身に整った顔立ち。そして上着を羽織った、この世界で言う今時の若者のような服装。これが彼の人間態である。

さっそく近くにあった階段を下りながらちやんと変身できたかどうかを確認するため、試運転のように両手を動かすシユガール。

ちなみにこのドラゴン、予定よりもかなり早く来てしまったので、元の世界とは違う人間界の常識を覚えながら指定された時間になるまで世界中を飛び回っていたりする。

「まさかここまで来て暇潰しをするはめになるとは思わなかつ……たぞ……」

今度自分の伝承がある国へ行ってみるか。そう思いながらツールに教えられた階へ着いた瞬間、シユガールは言葉を失っていた。

目の前にいるはずのない、亜人の姿があったのだ。しかも化けてい

るのは知り合いで、自分と同じドラゴン（雄）。これは酷い。

「よう、引きドラ」

『……シュガールカ。今夜ハサバトジャンカッタノカ?』

気軽に声を掛けたシュガールに対し、威圧的に返答する亜人の姿をしたドラゴン。

彼が財宝の守護を務める呪いの竜、ファフニールだ。人間への警戒心はシュガールやトール以上に強いものの、棲み処から一步も出てこないせいで知り合いからは引きこもり扱いされている。

「まあな。けどこっちの方が俺にとっては大事なんでね」

今もなお死んだと思われている仲間が生きていた。しかも人間嫌いだっただけだが、その人間の元で厄介になっている。

さらに凶悪で人間嫌いな彼女を手懐けたらしい、コバヤシという人間。

人とともに接した経験が少ないシュガールにとって、それは非常に興味深いものだった。

……夜宴の途中で自分の役割を放棄し、すぐさま異世界へ飛んでしまふほどには。

「ところでお前、その格好でいるつもりか?」

『トールガ人型ナラ何デモヨイト言ッテイタ』

「マジかよ。それじゃあ俺も背鰭——はまずいから角でも生やしてみるか」

シュガールがそう言って二本の角を生やすと同時に、ファフニールは早く入れると言わんばかりにインターホンのボタンを押す。

そこから間延びした高い音が響き、直後にドタバタと一人分の足音が聞こえてくる。すると目の前の扉が開かれ、人間の女性が出てきた。

「はい、どなた……」

馬の尻尾みたいに纏めた髪と死んだ魚のような目。彼女が例のコバヤシだろうか?

不意を突かれたこともあって思わず身構えたシュガールだが、すぐに杞憂だと判断して身体から力を抜く。リラックスというやつだ。

コバヤシはシユガール——の後ろにいるファフニールを見て固まっていたが、

「……………」

我に返ったのかそのまま静かに扉を閉めた。しかも無言で。

ファフニールは特に反応しなかったが、シユガールは内心戸惑っていた。どうして人の姿をしている自分達を見て閉めたのだと。

今度はファフニールに代わってシユガールがインターホンのボタンを押そうとしたところで、

「その姿はまずいですよファフニールさん！」

再び扉が開かれ、見慣れた顔の少女が出てきた。シユガールの脳内に記憶された彼女とは髪型が異なるものの、間違いなく向こうの世界で死んだとされていたドラゴンだ。

亜人の姿はいけなさと指摘されたファフニールが人間の姿に変身し、扉の先へ足を進めたところで、シユガールは閉ざしていた口を開く。

「……………久しぶりだな、トール」

「はい。お久しぶりです、シユガールさん」

残念ながら感動の再会と言えるほどのものではないが、彼らにとつてこの出来事はとても嬉しいものであると断言している。

互いに軽く挨拶を済ませたところで、シユガールはずっと気になっていたことを口にする。

「さつきも言ったがお前には後で聞きたいことが山ほどある。だが、これだけは今この場で言わせてもらおう。その格好は一体なんなんだよ!」

「見ての通りメイド服ですが?」

「そんなことは知っている! 俺が聞きたいのは何故お前がそれを着ているかだ!」

生きていただけでもあり得ないのに、らしくない言動に本人は嫌いな人間と一緒に暮らしている、挙げ句の果てにはメイド服ときた。

凶暴なドラゴンがメイド服を着ているという今日一番の衝撃を受け、混乱していた頭がパンクしそうになるシユガール。

なんなのこの世界。どういう原理で成り立っているの。前に俺が来たときは特に衝撃を受けるようなことはなかったのに、ドラゴンがメイド服を着ただけでこうも変わるものなのか……!?

どうしてこうなったと内心でひたすら頭を抱えるシュugarルに、トールは可愛らしい笑顔でとどめの一言を告げる。

「——ここで小林さんのメイドとして働いているからですっ!」

その言葉を聞いた瞬間、シュugarルは考えるのをやめた。もういや、と投げ出すように。

☆

「初めまして、シュugarルです」

「これはご丁寧にも、小林です」

家が上がってトールのご主人様と思われる例の小林と挨拶を交わし、頭を冷やすためにもフアフニールに続いて寛ぐことにしたシュugarル。

トールが従僕になるからどんな人間かと思えば、これといった力を持たない普通の人間じゃないか。彼女のどこが気に入ったというんだ?

静かにソファアーへ腰を下ろし、テレビゲームをやっている滝谷真という人間の男とフアフニール、そして民族衣装のようなドレスを着た幼女もとい幼竜——カンナカムイを眺める。

「今日はサバトの日じゃなかったっけ?」

いきなりトールや小林のものではない聞き覚えのある女性の声が聞こえ、思わずギョツとしながら後ろを振り向くシュugarル。

そこにいたのは露出の多い服を身に纏う、豊かなスタイルの女性。しかしその頭には二本の角が生えており、人外であることがわかる。顔を引きつらせながらも、シュugarルはどうにか平静を保って声を出す。

「ご、ご無沙汰してます、ルコアさん」

「そうだね。前に会ったのは一ヶ月ほど前だったかな？」

ルコアことケツアルコアトル。シユガールが知っているドラゴンの中では一番強く、それに加えかつては文明を司るほどの神だったこともあり、彼にとっては頭の上がない存在でもある。

「はい。その日も確かサバトがあつたはずですよ」

「もしかして今回も途中放棄しちゃった？」

「……………まあ、ツールに聞きたいことが山ほどあつたもので」

嘘は言っていない。実際この世界へ飛んできたのもそれが目的なのだから。

何を言えばいいのかわからないシユガールは背中に流している冷や汗を必死に隠しつつ、適当に思ったことを口に出す。

「あー、ルコアさんはツールが生きてたの、以前から知ってたんですね？」

「うん。本人から直々に連絡があつてね。僕も最初はびっくりしたよ」

「やつぱりか」

どうやら彼女の友人で生存の事実を知らなかったのは俺だけだろうだ。サバトのために表へ出まくっていたせいだろうか？

いや、仮にそうだったとしてもツールの交友関係はどちらかと言えば狭い方だ。単純に忘れていたということもあり得る。

本当にツールが教えるのを忘れていただけとは知らずに、意味のないことで考え込むシユガール。さすがに気づくべきである。

「それじゃ、僕は小林さんと少し話してくるよ」

「あつ、はい……………まあいいか」

そう言ったルコアが小林の元へ歩いていくのを見届け、考えるのをやめたシユガール。どうも集中力が持続しないタイプらしい。

☆

「だあーかあーらあー!! 私は初老派なの執事は！ 初老で完成形なの!!」

「いやいや！ 昨今は若い美形型鬼畜執事もなかなかのモノがあるで

ヤンス！」

「あの、やめろ……やめて……」

——何が起きているんだこれは!?

あのフアフニールが酔っ払いと変なメガネに圧倒されている。人間のことをよく知らないシユガールが驚く理由はそれだけで充分だった。

ていうか、人間って基本的に弱いんだよな？ 力のある奴が集結したのならまだわかるが、ここには二人しかいない。彼らの何がフアフニールをあそこまで押しているんだ？

目の前の状況についていけず顔の前で手を組み、驚き一色の表情を隠すように俯く。

が、そんな彼を天——もとい小林は見逃してくれなかった。

「おら！ そっちのにーちゃんもじつとしてないで執事になれ!!」

「あんた自分で初老派とか言っておきながら若人の俺に求めるのかよ!?!」

もうむちゃやくちやだ。こんなの俺が知っている人間じゃない。まさかツールもこの酔っ払い特有の圧力にやられたのだろうか？

そのツールは苦笑いで傍観しており、ルコアも笑顔だが少し引いている感じだ。カンナに至ってはまだ子供であるせいか、この状況下をまるで意に介さずぐつぐつと眠っている。

そして魔女とつるんばかりで人間という種族を理解できていないシユガールですら、暴走気味の小林と滝谷を見てこう思っていた。

——人間、恐るべしと。

シュugarルとドツジボール

——どうしてこうなった。

複数のクレーター、引き摺られたかのように抉れた地面、所々から上がっている黒煙、そして力尽きたように倒れている五人のドラゴン。

その内の一人に至っては思うところがあつたのか、地面に『ルコー』と書き残している。いわゆるダイイングメッセージだ。

隣では同居人のクラスメイトである一人の少女が腰を抜かしており、とんでもないものを見てしまったと言わんばかりに呆然としている。

目の前に広がる非日常的な惨状を見て、小林はそう思わずにいられなかった。

——時は今から一日前に遡る。

「コーヒー入りましたよー」

メイドになったトールの明るい声が室内に響き、来客の一人であるルコアと雑談をしていた小林が「ありがとう」とお礼を述べる。

向こうの世界では想像もしていなかった、大きな争いのない平和な日常。知り合いの一人に至っては学校とやらに通っていると聞いた。

うむ、悪くない。これはこれでアリだな。シュugarルはそう思いながら——

「隙ありっ！」

「何!？」

——友人であるファフニールとテレビゲームをやっていた。

ジャンルは格闘アクションで、相手の体力をゼロにしたら勝ちというシンプルなもの。

ファフニールがやり込んでいたこともあり、初心者のシュugarルは負け続けていたのだが、その連敗をようやくストップさせたのだ。

「これで……」

「十勝一敗だ」

勝った。やつと勝てた。

特に激しい運動をしていたわけでもないのに、気づけば肩で呼吸していた。

シユガールが乱れた息を整えたところで、ファフニールが十二回目の対戦を始めようと画面に表示されたメニューを淡々と選択していく。

「——ほら、あっちの二人も」

「ん？」

「ああっ!？」

小林の声に反応し、左の方へ視線だけを向けるファフニール。それと同時に、開始数秒でシユガールの操作するキャラをあつさり倒した。

秒殺記録がまたしても更新され、画面を見ながら唾然とする。いくら何でも早すぎる。どれだけやり込んだらこうなるんだ。

「このゲームはもう飽きた。他のものをやらせてもらうぞ」

「次は協力するやつにしようぜ……」

負け続きでへこむシユガールを見て、ルコアと小林は思わず苦笑いしてしまう。まあ初心者だし、相手が経験者ならこんなものだろう。

「二人ともトールの様子を見に来たんでしょ？」

「……………」

「まあ、俺はそのつもりでしたね。今日は休みだから仕事をサボらずに済んだし」

沈黙するファフニールを一瞥し、自分は答えておこうと口を開くシユガール。

彼が素直じゃないのはいつものことだ。コミュニケーション能力が低いとでも言うべきか。

……尤も、今回はトールの様子を見に來ただけじゃなさそうだが。「どんだけ仕事サボってるんですか……」

「失敬な。仕事よりも大事な予定が舞い込んでくるからそつちを優先しているだけで、理由もなくサボったりはしませんよ」

自分はただのサボリ魔じゃない。予定がなければきちんと与えられた役割を果たしている。毎回予定の入るタイミングが悪いだけなんだ。

「サボってまでペルーダと殺し合う必要はなかったと思うけど？」
ルコアのさりげない一言にピクツと反応し、口元を引きつらせるシュガール。

小林はペルーダという聞き覚えのない名前に首を傾げるも、直後に
出た殺し合うという言葉にはギョツとせざるを得なかった。

「殺し合いって……何やらかしたんですか？」

「俺は何もしてません。サバトに向かう途中ですれ違った際、アイツ
の方からガン飛ばしてきたんですよ」

どうしてそれだけで殺し合いに発展するんだ。

小林はシュガールに対する認識を改めることにした。もちろん悪い意味で。

ちなみにシュガールは最近知ったのだが、ペルーダは後に勇敢な人間の
手によって倒されたらしい。弱点の尻尾から真つ二つにされて。

「ただいまー」

ガチャリと扉を開け、帰宅したのは幼女ならぬ幼童ことカンナカム
イ。その後ろではクラスメイトであろう少女がメソメソと泣いている。
る。

一体何があったのか。そんなシュガールの気持ちちを代弁するよう
に小林が聞くと、カンナは目付きを少し鋭くして一言。

「決闘！」

「えっ!？」

「加勢しますよー!」

「……殺す」

決闘。その一言を聞いた瞬間、周囲の空気が一気に変わった。

殺気を放つ者、怒りで本性を剥き出しにする者、静かに傍観する者、
単純に驚く者。シュガールは感情豊かに反応する彼らを見て思う。
ここで反応しない俺はおかしいのかと。

そんな中、殺気立つドラゴンにビビった小林はカンナに説明を求め

た。

「決闘って一体何があったのさ」

「ん。今日の帰り道——」

同族故かドラゴン達の殺気にこれっぽっちもビビることなく、カナは事の経緯を話していく。

今から少し前。放課後になったのでクラスメイトの少女——才川リコと一緒に下校していたカナナは、彼女の提案で公園へ行くことになった。

穴場らしいそこで空飛ぶやつこと投石機みたいな遊具に興味を示していたところ、突如リコ目掛けてボールが飛んできたという。カナナが先回りして受け止めたので直撃は回避できたが。

ボールを投げたのは自分達より背が高い男子で、仲間と共に近場であるその公園でドッジボールをやっていたとのこと。

カナナが言うにはまだ話し合いのできる状況だったらしいが、何を思ったのかりコが彼らを必要以上に煽り出したのだ。

これにより男子達の怒りを買った挙げ句、ドッジボールで勝負することになってしまった。しかも提案したのは他ならぬリコ自身。

「——で、今に至ると」

「売り言葉に買い言葉だね……」

まさに自業自得である。さすがのシユガールでもこればかりは見捨てるか、悪いのはお前だと厳しく当たっていたに違いない。

しかし、小林は呆れることなくいつもの調子で問いかける。

「人数は揃ったの？」

そんな彼女の質問に、カナナは未だに泣いているリコをチラリと見て口を開く。

「ダメだった。才川人望ない」

「悪かったわね！」

清々しいほどのダメ出しを食らい、嘆くように大きな声を出すリコ。どうやら彼女の反応を見る限り、多少の自覚はあったようだ。

ていうかこれ、本気のカナナ一人でどうにかなるだろ。まだ幼いとはいえ彼女もドラゴン。人間相手に遅れは取らないはず。

小林がまだ交渉はできると呟いた途端、トールがそれだけはある得ないと叫び出した。

「我ら高潔で誇り高きドラゴンが舐められたわけですよ!? 断固戦うべきです小林さん!」

高潔で誇り高い、か……。

シユガールは知り合いのドラゴン達を、死んだ者も含めて思い出していた。

黄身のない卵で殴り殺された者、無駄に口の大きい者、足を蹴り上げるラバみたいな名前の者、水の妖精と同居している者。

……偏見かもしれないが、俺の知り合いにはトールがイメージする誇り高きドラゴンはあまりいない気がする。比較的大人しい連中ばかりだ。

「ドツジボールのルールわかってる?」

「もちろん! 一度見てますから!」

当然だろうと言わんばかりに両手を広げ、怒りながらも自信満々の表情で答えるトール。そんな彼女に感化されたのか定かではないが、沈黙を貫いていたファフニールとシユガールも続く。

「俺も知っている。爆心ドツジボールをやり込んだ」

「そういうゲームじゃないから……ッ」

「ドツジボールなら俺も知っていますよ。確か鉢巻を巻いている奴にボールを当てたら勝ちなんですよね?」

「うーん……間違っではないけど微妙に違う」

おいコラどつちだよ。思わずそうツッコみ掛けたシユガールだが、今はそんなことをしている場合じゃないと思いつまめた。

やる気満々のトールの掛け声にカンナとようやく泣き止んだりコが続き、ファフニールも黙ってはいるがどこか乗り気になっている。

そしてニコニコ笑顔で傍観していたルコアが、締めるように一言だけ呟いた。

「大丈夫。どうにかなるって」

☆

「なんだチビ、仲間呼んだのか！ 容赦しねえからな！」

翌日。例の公園にて、ドラゴン組はリコに煽られて勝負に乗った五人の男子と対峙していた。

すでに勝った気であるのか、ガキ大将っぽい少年が汚い声で笑っているのに対し、凄まじい眼力で彼らを睨みつけるドラゴン組。

そしてドッジボールが始まり、ガキ大将が投げたボールをトールが簡単にキャッチ。小林が彼女に『殺すな』と忠告したところから――

――蹂躪は始まった。

人間とドラゴン。結果はすでに見えていた。

ドラゴン組の誰かが一人仕留める度に跳ね返ってくるボールを、別の誰かがキャッチして違う相手に投げつけ、跳ね返ってきたボールをまた別の誰かがキャッチして投げつける。

相手はただの的。的がボールを持つことはない。また、避けようにも彼らの投げるボールが速すぎて避けることもできない。

実力差というか、種族差というか。要するにモノが違いすぎたのだ。

始まってから五分も経たないうちに男子グループはコテンパンにされ、

「ずるいぞバーカ！ 覚えてやがれ！」

などと吐き捨て、ボロボロになった身体を支え合いながらそそくさと逃げていった。

リコがトール達に感激し、カンナがさらつと毒舌的な発言をする中、当のドラゴン達は物足りない一人ずつ不満を述べていく。

「はあく、不完全燃焼ですね」

「奇遇だな、俺もだ」

「僕も」

「俺も。これはちよつとな……」

スペック差が圧倒的なので当然と言えば当然だが、あまりにも手応えがなかったのだ。

するとトールが何かを思い出したかのように「そういえば……」と呟いてシュガール達の方へ振り向き、好戦的な表情で口を開く。

「私はまだ、あなた方に勝ったことないんですよね」

「今日越えるか？」

「やってみろ」

「悪くない提案だ」

トールの案を受けてファフニールはおろか、あの温厚なルコアすら好戦的になって見ているのを見てシユガールは意外だと思った。

自分も売られた喧嘩は買う方だが、以前のルコアならまだしも、今の彼女がそういうことに便乗する姿は想像できなかったのだ。

相手が同族のドラゴンなら少しは楽しめるかもしれない。そう思いながらトール以上に好戦的な笑みを浮かべ、指を鳴らすシユガール。

小林が「これまズくない？」と呟き、彼女の隣で子供らしく乗り気になるカナナ。

——ここから公園は戦場と化した。

トールが本気で投げたボールをファフニールが片手で受け止め、ボールに紫色の魔力を纏い下手気味のフォームで投げ返す。

割れないような魔力で作った膜に覆われたボールが一球投げられる度に地面が抉れ、尋常でない量の砂埃が舞い上がっていく。

もちろんそんな状況で自分にだけボールが飛んでこない、なんてことはなかった。

「おっと」

自陣を超えないギリギリの距離から投げられたボールを指先一つで食い止めると、ジャンプしながら魔力で作った風をボールに纏い、脳天目掛けて投げつける。

顔面や頭部を故意に攻撃するのは基本的にファール——禁止事項だが、ドツジボールに詳しくないシユガールがそれを知るよしもない。

トールは凄まじい速度で迫るその球を両手で受け止めるも、舞い上がった砂埃がシユガールの風に乗ったことで広がっていく。

「うわっ!？」

当然小林とリコに軽い砂嵐が迫るも、前に出たトールが振り払った

ことで事なきを得た。

「シユガールさんやりすぎです！ あと少して小林さんが巻き込まれるところでしたよ!？」

「チツ……じゃあ次は電気にしてやるよ」

スイッチでも入っているのか、反省の色も見せずに舌打ちするシユガール。

それが原因だったのか、右手に電気を纏う彼に元神の裁きが下った。

「いつくよ〜」

カンナが投げたボールを軽々と受け止め、その痴女アジテーターな見た目からは想像もできないスピードで投げ返すルコア。

彼女の剛腕から投げられたボールは唸りを上げながら加速していき、

「ぐんぐん!？」

たまたま近くにいたシユガールを巻き込んでツールに直撃した。

彼女はぶつけられたボールを抱え込んでギリギリ凌いだものの、身構えてすらいなかったシユガールは俯せに倒れ込んだ。

おかしい。俺はルコアさんの味方だったはず。まあ投球した本人の慌てる様子を見る限り、少なくとも故意ではない。単なる事故だろう。

それでも納得のいかないシユガールは最後の力を振り絞り、犯人の名前を書く途中で――

「――おふっ」

力尽きたのだった。地面に『ルコ――』というダイニングメツセージを書き残して。ただしドツジボールのルー尔的にはセーフだったので、カンナの手によって優しく引導を渡された。

その後も当てられたドラゴンから次々と倒れていき、超次元的なドツジボールが終わった頃には公園が壊滅状態に陥っていた。

――という感じで今に至る。

「……………」

隣で腰を抜かすリコほどではないが、呆然とする小林。そんな彼女の心情を察したのか、一人のドラゴンが名乗りを上げた。

「ああ、公園は僕が戻しておくね。目撃者の記憶も弄つとく」

（便利な人だなあ……）

倒れたまま何でもありな発言をするルコアを見て、小林はそう思うしかなかった。

☆

「……お前今なんつった？」

「二度も言わせるな。俺は向こうの世界に住むことにした」

シユガールは目の前にいる友人のとんでもない発言に驚くしかなかった。

今日も暇潰しに彼が住んでいる洞窟を訪れたのだが、そこにいるであろうドラゴンの姿はなく、一人の人間が出掛ける準備をしていた。

その人間——ファフニールにどこへ行くんだと聞いてみたところ、向こうの世界に住むというとても信じがたい答えが返ってきたのだ。

「俺ならまだしも、お前じゃ絶対に無理だぞ」

人嫌いなうえに人見知り、さらにトールから聞いた話だとアドバイスには『殺せ』『呪え』しか言わなかったという。呪いの竜だけに。

「トールにできたのなら俺にもできる」

「……あ、それもそうだな」

ファフニールの言い分に少し考え込むも、確かにと納得してしまうシユガール。

彼の言う通りあの人間嫌いで凶暴なトールは今、その人間と共に暮らしている。それならコイツにも同じことができる可能性はあるだろう。

『調和勢』のドラゴンに目をつけられる可能性もあるが、その点に関してには自己責任だ。

「俺も近いうちに行くかもしれないが、トールによろしく伝えといてくれ」

「……フン」

いつそのこと、自分も彼やトールのように向こうの世界に住んでみようか。

洞窟を後にするファフニールの背中を見て、シユガールはちよつとした哀愁を感じていた。